

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

北朝鮮の人口流出と中国朝鮮族の未来： 脱北者問題を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 景旭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001426

北朝鮮の人口流出と中国朝鮮族の未来 脱北者問題を中心として

韓 景旭

西南学院大学国際文化学部教授

はじめに

日本の文化人類学界では、韓国研究とともに在外コリアンについての研究が盛んに行われており、とりわけ中国朝鮮族（以下、朝鮮族）についての調査と研究は活況を呈し、筆者が1992年夏に初めて朝鮮族の村落調査を実施した¹⁾時点までは、朝鮮族に関する出版物が旅行記と写真集くらいのものしかなかったことを思うと、今はまさに「朝鮮族ブーム」と言っても過言ではない²⁾。

1990年代から、それまで中国に生活の拠点を置いていた朝鮮族が、親戚訪問や出稼ぎを目的に渡韓し、韓国籍を取得して韓国人となるケースも珍しくなくなってきた。それと同時に、朝鮮族が商業活動で中国内の漢族居住区に進出し、子どもの将来を考えた戦略的な「漢化」により、あえて民族語を放棄する朝鮮族が増加しているのもまた事実である³⁾。このように、中国における従来の朝鮮族の母体が縮小しつつある一方、その穴埋めとして近年では、北朝鮮人と韓国人がそれぞれ中国内で急増しており⁴⁾、在中コリアンである朝鮮族の再編が行われようとしている。

したがって、在中コリアンについての研究は、従来の「朝鮮族」研究だけでは不十分となり、急増する韓国人と北朝鮮人を視野に入れた「新朝鮮族」研究が求められ、本稿はまず脱北者問題に焦点を当てることでそれに一石を投ずるものである。

1990年代以来、北朝鮮の食糧難が深刻化したことをきっかけに、中国に脱出する北朝鮮人が激増し、いわば「脱北者問題」が注目を浴びるようになった。それはやがて北東アジアの秩序と平和にも影響を及ぼしかねない国際問題にまで発展し、関係諸国からとくに注目されてきた。脱北の原因はさまざまで、食糧難のほかにも、外部情報との接触や北朝鮮内における社会逸脱者の増加、価値観の変化などが挙げられる。

しかし、脱北者問題が各界から注目を浴びているとはいえ、脱北者本人の口述を具体的に取り上げた事例はまだ少ないように思う。彼らが具体的にどのような理由で、しかもどのような方法で国境を渡るかを知ることは、今後の「新朝鮮族」を研究する第一歩となるはずである。

脱北者と称される人たちの大部分は、まず豆満江と鴨緑江を渡って中国に脱出し、それから韓国行きを考えるのが一般的である。朝鮮族や韓国人の庇護と援助が比較的簡単

に受けられる脱北者たちは、中国で食糧品やその他の生活必需品を入手して北朝鮮に戻る場合もあれば、引き続き中国内に滞留するケースもある。北朝鮮に戻る人たちのなかには、越境を繰り返しながら生活している者が多く、また中国内に留まる人たちのなかには、韓国への脱出を考えている者も少なくない。しかし、運良く韓国に行ける者はごく僅かであり、大部分はやはり中国で戸籍を入手し、生活の基盤を築くことになる。彼らはやがて「新朝鮮族」となり、漢化しつつある今日の朝鮮族の空白を埋めていくだろうと筆者は予想している。

このような「新朝鮮族」の予備軍としての北朝鮮人が、具体的にどのような理由と方法で祖国を離れ、また中国に渡ってからは朝鮮族や漢族、韓国人とどのような関わりをもつのか。これらの実態の一面を脱北者の口述によって明らかにするのが本稿の狙いである。

1 脱北の背景と要因

筆者は2003年9月に中国山東省で脱北者N氏に対して集中的な聞き取り調査を行った。インタビューに応じてくれたN氏は、1996年から約30回にわたって中朝国境を行き来しており、脱北者問題についても自分なりの考えをもっていた。脱北の背景と理由に関するN氏の口述はおよそ以下のようである。

北朝鮮人はこれまでに、国からさまざまな生活保障を受けながら暮らしてきた。国民もまた国のために貢献すべきだという原則と意識の下に仕事をしてきた。私が軍隊に入る前、父は工場の資材課で管理人として働き、母は病院で医者として働いていたが、われわれ5人兄弟を養うのにとくに困難はなかった。ところが、1993年に私が10年余りの軍隊生活を終えて帰郷すると、配給が半減し、貧富の格差も大きく広がっていた。私はただ、アメリカなど帝国主義者らによる経済封鎖と人びとの勤労意欲の低下によるものだとは思っていた。しかし、原因はそれだけでなく、自然災害により農業が大きく破綻し、労働者への配給も滞るようになり、人びとは食料難に苦しむようになっていった。

初めはどうしたらよいか分からなかった人も多かった。一部の人は時代の変化についていけず、疾病や飢餓で一人また一人と倒れていった。また一部の人は、経済難で苦しみつつも気を引き締めて新たな生活に適応していった。生き残りをかけた作戦は、都市と農村では異なっていて、都市では配給が途絶えたために、職場を離れて行商をはじめめる者が増え、農村では自宅で酒を密造する家庭が増えた。しかし、生活力のない人たち、特に老人や子供、病弱な人たちは次々に死んでいった。こうした状況のなかで、一部の人は生命の危険を冒して中国への脱出を図った。巷では、今日は誰それが死んだ、誰それは中国に脱出した、あるいは捕まった、どこそこの家には泥棒が入った、などの噂が

絶えなかった。そこで、私もいろいろと考えた末に、中国に渡るのが最善の方法だと判断した。

捕まることなく中国へ行って来た人たちの話も多く、中国はまるでこの世の天国のように豊かな国だということもよく耳にした。「中国人は真っ白なご飯だけを食べている」「肉はいつでも食べられる」「中国では動物にも穀物を食わせ、犬にもご飯を食わせている」「百貨店や個人の家にはわれわれが生まれてこの方見たこともない品物でいっぱい」「道端で食べ物を拾いながらでも生きていける」。朝食べたら次の食事が心配となる人たちにとって、それこそ夢のような話ばかりで、人びとの尽きない欲望を喚起した。

親しい仲間同士で集まると、必ずと言っていいほど中国に関する話が話題の中心となった。もちろん、法的な制裁が怖くて話さえできない者も多かった。渡江に失敗して捕まったら、まずは反逆罪に問われ、監獄に放り込まれ、生涯政治的な汚名が付き纏うことになるからだ。実際に捕まって監獄に入れられた者もいて、いつになったら釈放されるのか、誰も知らなかった。最初の頃は、よほど勇気のある者以外は国境を渡ることについて具体的に考えられなかった。ところが時間が経つにつれ、餓死するよりは一度生命を賭けて脱出してみたいと考える人が増えるようになり、また脱出に成功した者も一人、二人と身近に現れるようになった。稀に捕まる者もいたが、無事に国境を渡る者のほうがずっと多かった。

ほとんどの人は経済難を克服するために国境の川を渡った。もちろん、国家に対する嫌悪感をもって越境する者もいたが、それはごく一部に過ぎなかった。大多数の人は、「一人の口を減らすだけでも家族の経済的な負担が減る」とか、「このままでは餓死してしまう。まずは生きることだ」というような理由で国境を渡った。

2 中国における脱北者の生活

N氏の口述によれば、中国における脱北者の生活状況はおおよそ次のようである。

中国に脱出して定着した人の大部分は女性であり、男性は中国に渡ってから再度朝鮮に戻るケースが多い。女性の場合は中国で足場を固めて暮らす方法はいくらかでもあるが、男性の場合はそうはいかない。周知のように、中国の多くの成人男性、とくに農村地域の男性には結婚したくても相手のいない人が多い。農村の若い女性はよりよい生活を求めて都市や海外へ行ってしまったからである。そのほかにも、若い女性は都会の遊興業界で働くことができる。

ところが、男性にとっては働く場が不足しており、朝鮮族男性の中にも、仕事がなく毎日ぶらぶら遊んでいる者が多い。それから、放浪している朝鮮人男性にとって、立場上家を借りること自体が困難なことである。仮に家を借り得たとしても、長期的に家賃や光熱費を支払う能力のある者は少ない。そのため、犯罪に走る者も多い。真面目に

働きたくても、漢族社会のなかで働くにはまず言葉の壁がある。それでも、何回か国境を行き来するうちに、朝鮮族を通じて日雇いの農作業などをしながら若干の金を稼ぐことができた。とくに田植えと刈り入れの季節には、日雇いの仕事を見つけることができるため、朝鮮の男性が国境を渡る場合が多い。もちろん、身分的には不法滞在になるので、あらゆる面で気を付けなければならないし、また心ない一部の中国人によって搾取されることもある。ひどい場合は賃金すら払ってもらえない。

心優しい人たちから食べ物や衣服を少し恵んでもらったり、場合によっては運良く仕事場を紹介してもらったりすることもあるが、最近は越境者があまりにも多いため、そういうことも少なくなってきた。凍てつく1月の寒さのなか、町で寝る場所もなく彷徨していたとき、愛の手を差し伸べてくれた人がいたことについては、いつまでも感謝し続けるだろう。

中国に渡る前の夢は一応実現したと思う。なぜなら、食べて、生きていけるからである。中国に渡ってからさまざまな困難に直面したことは事実だが、食べる面では最初からほとんど問題がなかった。だから、さまざまな危険や困難を克服して脱出に成功した人びとにとって、その目的は一応実現したことになる。

3 N氏が脱北した理由と経過

N氏は、自分が脱北した理由と経過について、次のように語っている。

1999年夏に妻と一緒に朝鮮を離れて中国に脱出した。それは、朝鮮の法律の中でも重罪にあたる政治的な問題に抵触したのが原因であった。中国と北朝との間を行き来しながら、国境付近に勤務している一人の保衛官と知り合いになり、彼の生活を援助しながら身の安全を確保してきた。国境を行き来していた当時、金が手に入らなかった場合は手ぶらで朝鮮に帰ることも多かったが、その保衛官は事情を理解し、自分のことを信用してくれた。

1999年春のことである。商売がうまくいかず、延辺のトムンにある親友の家にたびたび転がり込むようになった。ある日、近所のおばさんが私に金儲けのチャンスがあるから一度やってみないか、と話を持ち掛けてきた。自分としては断る理由がなかった。しかし、その内容はというと、朝鮮に戻ってある人物を連れてきてほしいとのことであった。

本当の依頼者は韓国人で、朝鮮戦争の時に北に置いてきた娘二人を探していて、どのようにして知ったかは分からないが、娘たちの現住所と名前を私に教え、連れて来てほしい、とのことだった。そのおばさんは、躊躇している私に対して、娘を探している父親は今も幼い頃の娘の写真を見ながら毎晩泣いているよ、と悲しげに言った。私はどうとうその危険な任務を引き受けることにした。

韓国人の父親は76歳で、探している娘の一人は55歳であった。9歳の時に生き別れたという。彼女の名前は×××で、朝鮮の咸鏡南道のある農村に暮らしており、家庭経済は困窮を極めていた。約10日間の旅を経て、彼女の家に行ってみると、旦那さんは病に臥しており、子供は見当たらなかった。私は簡単に自己紹介をしたあと、彼女に父親をいつ亡くしたのかと訊ねた。戦争の時、爆撃によって亡くなったと聞かされており、父親はもうこの世にはいないものと彼女は思い込んでいる様子であった。父親が今、中国の延辺に住んでいると私が言うと、彼女はとうてい信じられないと言ったが、預かってきた写真を見せると、ようやく涙を流すのであった。彼女の家で3日間滞在し、米を買ってあげるなどして、少しずつ親しくなっていた。話し合いの結果、中国へ渡るためにまず私の家に移ることにした。その時、彼女は自分の幼い頃の写真を一枚持って行った。彼女は極度の緊張に耐えながら、一週間ほど我が家に滞在した。私たちは周囲の安全を再三確認した上、ある日の早朝に国境を渡って中国のトムン市に辿り着いた。中国に渡ってから、私は彼女に初めて父親が延辺にいるのではなく韓国にいることを告げた。彼女はとても驚き、緊張と不安の気持ちでいっぱいだった。私がトムンから韓国にいる彼女の父親に電話を入れたら、翌日の午後3時の飛行機で延吉に向かうと告げられた。

次の日、2人で延吉飛行場に彼女の父親を迎えにいった。父と娘のおよそ半世紀ぶりの再会を目の当たりにして、私は胸が締め付けられる思いをした。3人は車で約1時間走ってトムンに着いた。彼女の父親は、トムンに住んでいる仲介役のおばさんに感謝の気持ちを込めて5,000米ドルを渡し、私とその娘にもそれぞれ3,000ドルと2,000ドルを渡してくれた。そして、今回は娘の生存事実を確認するだけにとどめ、韓国にいる息子と娘を同年11月に中国へ連れて来るから、その時に再会して、改めてお礼すると父親は約束した。しかし、娘は朝鮮に帰ってから、予期せぬトラブルに巻き込まれてしまった。

私が米ドルを直接朝鮮に持ち込むのは危険だとあれほど注意したにもかかわらず、彼女は父親から受け取ったすべての金をドルのまま朝鮮に持ち帰った。私が朝鮮の金に一部換金してあげるとも言ったが、彼女は金を見た瞬間、他人を信用しなくなり、自分の取り分は自分で全部持ち帰ると言い張り、私としてもどうすることもできなかった。その時は、なんだか他人の金に欲を出しているように見られるのも嫌な気がして、心配しながらも彼女の言いなりにしてあげたが、後にそのことが命取りになるとまではついぞ考えが及ばなかった。それまでに貧しかった家が急に金回りが良くなったので、保衛部からの監視を受けるようになり、数日後には金を取り上げられた上に、彼女自身もどこかへ連行されてしまった。これで取ればよかったが、彼女は私の名前と住所まで言ってしまい、深夜に私への緊急逮捕令が下された。私が以前から親しくしていた例の保衛官が深夜2時に突然家を訪ねてきて、早く逃げろと言ってくれた。私と妻は、寝ている1歳の赤ん坊を義理の母に預け、すぐさま家から逃げ出した。もし、その時に捕まっていたらおそらく命はなかっただろう。

これまでに数十回も国境を行き来しながら、いろんな危険に出くわしてきた。国境警備隊員から銃口を突きつけられたこともあったが、天の助けでいまだに生きながらえている。捕まったら殺されるという必死の思いで何度も国境を渡った。

一度はこのようなことがあった。父が中国に脱出している私に会うため、中国に内緒で渡ってきた。その時、国境警備隊員に10日間の約束で中国の金400元を渡した。当時、私は中国で稼いだ金を500元ほど持っていたが、全部渡しても父の手元に残るのは賄賂で使った400元を差し引いた100元しかないので、約束の期間が過ぎてからも父を帰さずにそのまま中国に居させた。そして3カ月後、私と父は延辺の友人2人を連れて、以前から渡江に使っていた秘密の場所まで行った。雨のせいで水かさが海のように増えていた。幸いにして私は泳ぎが得意だったので、どうにか父を助けて無事に向こう岸に辿り着くことができた。荷物をほどこき、着替えをしようとした時、わずか3メートルの至近距離で、警備隊員3人がいきなり銃を突きつけてきた。「手を挙げろ！」と彼らが叫ぶや否や、私は反射的に豆満江に飛び込んだ。警備隊員たちは「戻らないと撃つぞ！」と叫んだが、私は振り向きもせず、必死に泳いで再び中国側に渡った。そのとき、私は警備隊員に捕まった父のことを思いながら、対岸からどれだけ涙を流したことか。家に帰って来ても、父の事を思うと、居ても立ってもいられなかった。何日も食事が喉を通らず、夜も眠れなかった。その時に味わった無力感と屈辱は、いつまで経っても忘れられない。

現在、豆満江の国境警備は一層厳しくなっている。しかし、金を警備隊員に渡して国境を渡ることは日常的に行われている。私の義理の母親も、中国の金500元をある警備隊の幹部（約80人ほどを受け持つ指揮官）に渡して中国まで来たことがある。

朝鮮に強制送還されたら取り調べを受け、投獄されるか労働鍛錬隊で強制労働をさせられる。しかし、最近では地方ごとに規定が異なり、処罰もだいぶ緩やかになった。たとえば、以前なら間違いなく投獄されていたはずの者も、今では労働鍛錬隊行きで済むようになった。また、政治的または特殊な罪を犯さない限り、制裁を受けないケースも多くなった。少なくとも命まで奪われることはなくなった。しかし一方、人身売買による犯罪が増え、それに関わった者がつい最近10人ほど死刑になった話を聞いたことがある。

次第に変化する朝鮮の現実には、私を含めたすべての越境者に大きな希望を持たせてくれている。一日でも早くこのような恥辱的な他郷生活を終わらせ、故郷に戻る日がくることを願っている。

4 事例にみる脱北の実態

ここではN氏の口述をもとに、北朝鮮人が具体的にどのような方法で脱北を実現するのかについて述べる。なおプライバシー保護の観点から、登場人物についてはすべて仮名を使うことにした。

A. 賄賂を渡して川を渡る

1995年頃までは中朝国境の警備が非常に緩かったが、近年は朝鮮側の国境警備隊が豆満江を厳しく守っており、越境が大変難しくなってきた。そこで最近では、警備隊内部で脱出計画者から組織的に賄賂金をもらって、中国に脱出させるケースもみられるようになった。しかし、仮にこのようなことが暴露されたら、その計画に加担した軍人たちは軍事規律に従い、除隊もしくは投獄されることになる。

国境警備隊員に賄賂を渡す方法で運良く中国に渡るケースは多いが、時には金だけ取られてしまうケースも少なくない。たとえば、私が住んでいた町のテ Chol は、豆満江の国境警備隊員の、中国に行かせてやるという言葉に4,000ウォンの金を支払ったが、騙されてしまい、金を返してくれと言おうにも、制裁が怖くて誰にも打ち明けられなかった。このように、金が払える人はまだ幾分かましな暮らしをしている人で、テ Chol もその一人だったが、4,000ウォンは彼の全財産と他人からの借金だった。後に彼はやるせない気持ちで、無謀に国境を渡ろうとして警備隊員に捕まり、1年間も朝鮮の監獄に入れられ、今は長期患者として寝たきりの状態である。金を支払ってなんとか中国に行ける人がいる一方で、テ Chol のように悲惨な結末を迎える人も少なくない。

国境警備隊員たちの生活もまた大変困窮したもので、近くの民家に通いながら食事や酒を恵んでもらうケースが多い。また、軍隊でも食料供給が不足している場合は一日一食の粥で暮らさなければならなかった。したがって、ある程度暮らし向きのいい人は軍人たちを利用して国境を渡っていた。軍人たちもまた住民と親しくなりたいと願い、中国にこっそりと行かせることを条件として、時々食事を恵んでもらいながら食料難を乗り切ろうとした。その後、越境問題が深刻化し、軍人たちも制裁を恐れて「越江企画者」たちに直接会うことが少なくなり、危険度が増してくるにつれ、住民たちも軍人に金を渡すことに対して極めて慎重になってきた。そして最近では、国境警備隊内部の権力者だけで組んで金をもらって住民を脱出させているケースが増えてきた。しかしこのようなやり方では、越境者の安全性が保障される反面、要求される金額がとてつもなく大きくなる。もちろん、命がけで稼いだ金だから、没収されたらそれなりの抵抗はするのだが、抵抗し続けても殴られた後に法によって裁かれるのが落ちである。妻の母は苦勞して中国に渡ったにもかかわらず、なんの収穫も得られずに帰ってしまい、私も妻も胸が引き裂かれそうな気持ちであった。

ほかにも、以前から中国を行き来しながらその秘密のルートを確認している人たちに依頼して国境を渡る場合がある。初めて中国に渡る人たちにとっては言葉や地理の問題があるため、ブローカーに金を払って渡江するのである。また、金のない場合は、目的地に着いてから、親類や知人から金をもらってブローカーに渡すこともある。朝鮮北部に住んでいる朝鮮人のなかには、中国延辺に親類のいる者が多い。ブローカーも要求した金を確実にもらうために、まず相手先の親類の家庭状況を具体的に調べる場合が多い。

親類に電話をしたり、または直接会ったりして事実関係を確認してから、朝鮮に渡って関係者を連れてくるのである。ブローカーに払う金さえあればなんとか安全に脱出できるのに、そのような金がなくて、危険を冒して川を渡ろうとして国境警備隊員に捕まり、悲惨な目に遭う人も多い。

B. 生命の危険を冒して川を渡る

多くの越境者は金もなく、また目的地も定めず、とにかく中国に行けばどうにかなるだろうという安易な考えで国境を渡る。そういう人たちにとって、渡江とその後に待ち受けている困難や試練は数え切れないほど多い。私の従兄弟二人もそうだが、生きる道を求めて無謀にも豆満江に飛び込み、いずれも帰らぬ人となった。川が深く流れも急で、よほど泳ぎに自信のある者でないと渡江は危険である。それに、寒い季節であればなおさらである。川幅の狭いところも多いが、そういったところは警備が厳重で、捕まる確率が高い。しかし、冒険してでも運良く渡江に成功した者もまた多い。

知人のパクさんは、とにかく国境を渡らなければ死ぬかもしれないという一念で渡江に成功した一人である。1998年春のことである。山にはまだ緑がまばらで、人びとは食料難で苦しみ、多くの朝鮮人が渡江して中国に渡ったが、パクさんもそのうちの一人だった。具体的な計画も立てずに家を飛び出してきた彼は、緊張した気持ちを抑えながら、周囲に人影のないことを確認して思い切って豆満江に飛び込んだ。26歳の青年で、泳ぎも得意だった。冷たい豆満江の水をかき分けてなんとか渡江に成功し、無我夢中でたどり着いた地点が中国側のある小さな村落だった。なお、この区間での渡江は昼間に限る。夜間は警備隊員が潜伏監視を行っていて、接近することすら難しいからである。

ところが、このような方法で越境する者が増えるにつれ、昼間にも警備隊員を潜伏させ、監視を強化するようになった。何も知らずに国境を渡ろうとした者が数多く捕まったのはいうまでもない。また、警備が強化されていることも知らず、同じルートで朝鮮に帰る途中で逮捕される者も多かった。パクさんもまた帰途で捕まった一人で、持ち物を全部取られただけでなく、死ぬほど殴られて一年半も監獄に入れられ、出てから再び中国に渡り、その後の消息は分からない。

私のもう一人の知人であるりさんは、さんざん苦勞した末に妻と娘を連れて中国に渡った。彼らは約10日間の偵察と苦心の努力によって豆満江を渡り、中国への脱出を成功させたのである。その後、偶然にも延辺の小さな町で逢うことができ、放浪していた彼らを家に連れて来て、脱出の経緯などについて詳しく聞かされた。

2001年12月のある日、りさんは燃料の枯れ木を集める振りをして、国境の警備状況を偵察していた。そのとき、突然二人の国境警備隊員が現れ、国境を渡る目的で来たのだろうと言って拘留され、殴られもしたが、最後まで自分は枯れ木を集めるために来たと言い張っていたら、渡江の確実な証拠もなかったので、3日目には自由の身となった。

なお当時は、越境者が続出した時期だったため、民間人が豆満江に接近することは禁止されていた。このような偵察方法が失敗に終わると、今度は警備隊員を通じて国境の警備状況を知ることにした。

農民市場でうろろしている軍人を家に案内し、トウモロコシのご飯とワカメスープをご馳走した。いろいろと話をしているうちに、その軍人の故郷が平安道サンジョンという町で、年齢は19歳、一年前に軍に入隊し、空腹に耐えかねて今日部隊から脱走したとのことであった。私も約10年にわたって軍隊生活を経験しているため分かるが、軍隊では飢えや肉体的な疲労、そして喧嘩などで軍隊を離脱して一定期間放浪する者は少なくなかった。永久に戻らない者もいるが、ほとんどの者は数日ないし数カ月後には元の部隊に帰還した。体罰などの処罰を受けることは請け合いだが、とくに新兵のなかにはそれらを覚悟して脱走する者が続出した。また、賄賂などで上層部に通じている者は軽い処罰で済むことも多かった。

彼は食事を一気に済ませた後、本当に感謝する、と言って頭を何回も下げた。帰り際に、リさんが彼にこれから部隊に帰ったらきっと批判を受けるだろうが大丈夫か、と訊ねると、処罰は覚悟のうえであり、とりあえず腹いっぱい食べられたので助かったと彼は答えた。国家が混乱し社会がますます混迷する中、軍人たちは供給されるべき食糧さえももらえない状況で、入隊したばかりの軍人たちは耐え難い空腹を経験することになる。その若い軍人を可哀相に思い、酒を二本持たせながら、上司に飲ませて許しを請うように言うと、彼は涙しながら帰って行った。もちろん、その軍人を帰す時に、時間があれば数日内に必ずまた来てほしいと頼むことも忘れなかった。

3日後、その軍人は案の定、深夜1時頃に訪ねて来た。今度は、自分が軍に入隊する時に父がくれた腕時計を差し出しながら、腹いっぱい食わせてください、とのことだった。腕時計を受け取るのは断り、リさんとその妻は軍人にご飯を作って食べさせた後、単刀直入に、中国へ行こうとしているので安全な渡江位置を教えてください、と聞いた。軍人は夢中にご飯を食べていたが、その話を聞いてかなり驚いた様子だった。しかし、彼は落ち着きを取り戻し、自分にはそういう能力はないと率直に打ち明けてくれた。国境を無事に渡してくれるのは、金をたっぷりと受け取った上層部の軍人ばかりで、彼のような下級兵士には縁のない話のようであった。そこで、リさんは道を教えてくれるだけでもいいと頼んだ。ふたつの警備番所の間を縫って脱出するつもりだった。その軍人もリさんの大胆な目論みの意味を理解し、知っている限りのことを教えてくれた。万が一脱出がうまくいかなかった場合でも、その軍人のことは絶対に言わないとリさんは言って彼を安心させた。約1時間の討論を経て、渡江の場所と時間、警備隊員の勤務状況などを把握し、リさんは朝鮮の金100ウォンを軍人に握らせ、互いに二度と会わないことを誓った。

翌日の深夜12時ごろ、元日を目前にしてリさん夫妻は娘を連れて震える体と心を抑え

ながら豆満江に接近した。番所と番所間の距離は150~200メートルで、警備隊員の様子を窺いながら河岸へと進んだ。危険を察知してか、最後までじっと耐えてくれた10歳の娘には感動した。もし娘が咳一つでもしたら大変なことになるだろうと思い、娘の口の中には飴代わりに娘がよく舐める塩の塊をほおぼらせたのだった。しかし、凍てつく寒さに耐えながらも、声一つ出さなかった娘はすごかったとりさんは何度も言った。苦難の多い歳月が、このような幼い子供たちを早熟させていると言ってもいいだろう。

いよいよ豆満江の河岸までたどり着いた彼らは、周囲を見回して安全を確認した後、凍った豆満江の上を滑るようにして中国に向かってひたすら走った。しかし、その直後に思わぬ事態が発生してしまった。妻が氷床のうえでいきなり倒れてしまったのである。あまりにも緊張して気絶してしまった。これまでは一度もそのようなことがなかったのに、極度の緊張に押しつぶされてしまったのだろう。りさんはとにかく倒れた妻を抱えあげ、娘の手を握り締め、300メートルほどある凍りついた河の上を無我夢中で走った。

どこからそのような力が沸いたのだろうか。対岸にたどり着き、追っ手がいないことを確認してからりさんは妻を横にさせて手足をマッサージし、人工呼吸も行った。しばらくして、妻はようやく意識を取り戻した。りさんの妻は今もそのときの後遺症でときどき頭痛を訴えているという。

このような過酷な試練を乗り越えて脱出に成功したりさん一家だが、その後の中国での苦労も言葉では言い表せないほど多かった。私が中国で彼らに逢ったのは2002年2月の初旬だった。一カ月余りの流浪生活を経た彼らの格好はととてもみすぼらしいものであった。生きるためだけに渡江した彼らは、腹いっぱい食べられるのでそれだけでも満足だと言った。パクさんやりさんのような経験をしないで、中国に脱出した者は果たして何人いるだろうか。

C. ブローカーを通じて川を渡る

初めて中国に来たとき、中国には男性が多く、女性が少ないということを知ってとても不思議に思った。今でもそうだが、中国の農村で若い女性に出会うことは滅多にない。そのため、国境を渡って来る朝鮮人女性は、嫁不足で悩んでいる中国人男性にとって間違いなく大きな希望となっている。中国人は朝鮮人の越境を手伝っているが、それはただ自分たちの利益のために手を貸しているに過ぎない。私は今も中国人に会うと、朝鮮から女を連れて来てくれないかと頼まれる。

1998年のことである。近所に妻と親しく付き合っていた女性がいたが、彼女の家の経済事情はとても悪く、夫は既に他界していて、母と弟は病に臥せていた。彼女の頼みで、私はウネという娘を連れて中国に渡ることになった。ウネの伯母が中国延吉に住んでいるので、ウネだけでもそこに連れて行ってほしいとのことであった。ウネの伯母もまた彼女を中国に住ませようとした。延吉に来れば結婚はすぐできるので、彼女だけで

も中国で結婚して幸せになってほしいとのことであった。ウネもそれまでに朝鮮でさまざまな苦勞をしてきたので、そうしたいと答えた。しかし、私の心配はまた別のところにあった。もし、後日このことが当局に知られたら、私はその責任を追求されるに違いない。

そこで、私は身の安全のために彼女を延辺から一旦朝鮮に連れ戻した。ウネは朝鮮に帰ってきて約二カ月過ごしたが、後に中国に住んでいる彼女の伯母が、中国に出入りしている朝鮮人に金を渡して、彼女を再び延辺に連れていった。現在、ウネは伯母の紹介で或る朝鮮族と結婚して、朝鮮にいる母親に少しずつ送金しているという。なお、このようなケースは稀で、ウネは運がいいと言わなければならない。金も親戚もなく、社会的に力もない女性たちが、人身売買の対象となって中国に連れて来られる悲惨な現実は今も続いている。

延辺のリャンス鎮は、朝鮮咸鏡北道オンソンと向かい合う小さな町である。リャンス鎮とオンソンに挟まれた国境地帯では、豆満江が二つに分流し、中洲状の島を形成している。この島の面積は大きく、オンソン郡（人口約10万人）で生産されるトウモロコシの約3分の1がこの島でとれている。農業成績も他の地域に比べて優れており、政府による期待も大きい。中国側に流れている川（国境川）幅は約3メートルで、水深は足首を超えないほど浅い。そのため、朝鮮族もこの島の人たちと接触する機会が多い。中国に脱出する人がいなかった時代は、川を挟んで物々交換が行われたり、対岸の親戚にも会えたりした。

朝鮮側の川幅は約80~100メートルでしかも深く、労働者は船に乗って行き来している。島には農場の会議室、脱穀場、倉庫などがあり、収穫されたトウモロコシは豆満江が凍った冬に運搬される。したがって、他の農村に比べてこの島での作業時間は長い。ここは地形上、中国へ瞬時に渡ることができるため、朝鮮政府は保衛部の者を派遣して常時監視を行っている。このような監視員の身分は明かされず、脱出の気配のある者を保衛部に報告し、脱出の防止に努めている。

私と同じ町に暮らしていた或る女性も、この島で働いている間に中国へ脱出した。当時彼女は23歳という若さであったが、一家の経済を支えていた。ある日、島で仕事をしながら対岸の朝鮮族女性（40歳）と知り合いになった。1998年の夏だった。午前の仕事を終わらせてから、豆満江で顔を洗っていると、向こう岸から一人の朝鮮族女性が近寄って来た。川幅が狭いので、互いの顔がはっきりと見えた。彼女はびっくりして一度周りを警戒したが、誰もいなかったものでほっとした。中国側にいた女性が、「仕事大変でしょう？」と言いながら小さな袋を投げてくれた。彼女は周囲に誰もいないことを再度確認してから、その袋をすばやく懐に隠した。家に帰って袋を開けてみると、化粧品や飴や中国の金100元が入っていた。そのことをきっかけに、彼女は中国に行きたいという願望を強くもつようになった。

数日後、その朝鮮族女性がまた川の向こう岸にいたので、チャンスをうかがって接近し、中国に渡りたいので協力してほしいと頼んだ。朝鮮族女性はすんなりと承諾し、川を渡ってきた彼女をオートバイに乗せてどこかに消えてしまった。実家では、未だ彼女の行方を知らないという。

売られてきた女性たちの最初の運命を決定するのは自分自身ではなくブローカーである。私が暮らしていた中国延辺のある農村でも越境した女性が10人ほど住んでいるが、彼女たちの運命は実に悲しいものであった。皆中国の漢族や朝鮮族と結婚しているが、その中のある女性は22歳で40歳を超えた人と結婚しており、ある女性は精神的に問題のある者と結婚している。またある女性は子供まで産んでおきながら、中国の事情をある程度把握すると、家出をして都市の歓楽街で自由奔放な暮らしをしている。結局、女性だけでなく男性や子供も被害者である。中国では今でも、越境してきた女性との間にできた子供は法的に認められず、私生児として育てられる。残された子供は年老いた祖父母の手で育てられ、老夫婦は毎日を涙とため息で過ごす。私はこのような哀れな光景を何度も見てきた。

おわりに

冒頭でも述べたように、脱北者問題は今や国際的な外交問題にまで発展しており、今後も引き続き関係諸国の関心を集めると思われる。なかでも、国境をもっとも広く接し、つい最近まで同盟国であった中国が果たすべき役割は大きい。中国政府は北朝鮮当局との外交関係を考慮しつつ、多様化してきた脱北者について類型別に対応し、脱北者の生存権と人権を守ることが求められよう。

戦後、北朝鮮人が中国へ大量に流入しはじめたのは1997年からである。同年から1999年までの間に、およそ30万人の北朝鮮人が飢餓を逃れて中国に脱出したとの見方もある⁹⁾。2000年からは脱北の動機も多様化し、金を稼いでよりよい生活を実現するための脱北者が増え、2002年ごろからは、よりよい生活のために中国での定着を図り、または韓国行きを夢見る者が増えるようになった。彼らの多くは中国で子育てをし、生活基盤をつくり、やがて中国人の一部となるだろうと筆者は予想している。

北朝鮮の食糧難については、自然災害や農地不足の問題以外にも、集団農業の非効率性、密式栽培や梯田建設など「主体農業」の失敗、肥料や農薬など農業用工業製品の不足、農民の労働意欲の喪失などの原因が挙げられる。そして、近い将来に食糧難が克服されるとしても、外の世界を知ってしまった多くの北朝鮮人が、よりよい生活を求めて国境を越え続けることが予想される。

越境現象はすでに長期化の様相を呈しており、仮に北朝鮮の経済改革がさらにすすんでも、越境が持続的または断続的に行われるに違いない。越境の方法は時代によって多

様化しており、本稿で挙げた事例からも分かるように、国境警備を強化することで、越境者がなくなるような時代ではなくなったのである。

以上のように本稿では、もっぱら脱北者問題、とくに脱北の背景と方法を中心に考察してきたが、その目的はあくまでも中国における朝鮮族の未来像を描くことにある。また本稿では、中国で急増している韓国人の実態についてはほとんど述べていないが、「今日の朝鮮族は、漢化および都市と海外（主に韓国）への移住によりその規模が縮小しつつあり、場合によっては消滅に向うかもしれないが、その代替者として、北朝鮮人と韓国人が中国内で急増しており、やがては『新朝鮮族』を形成していくだろう」という筆者の予想をもって本稿の結論としたい。

注

- 1) 筆者は1992年夏から朝鮮族に関する文化人類学的調査と研究を実施し、「中国の朝鮮族(1)——村と村人の生活史」『中京大学社会学部紀要(8-2)』を皮切りに10数編の朝鮮族に関する論文ないし研究ノートを発表し、その大半は『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』(中国書店, 2001)に収録されている。
- 2) これまでに、日本国で出版された朝鮮族に関する単行本は以下の通りである。大村益夫 訳『中国の朝鮮族』むくげの会(1987), 館野哲他 訳『聞き書き・中国朝鮮族生活史』社会評論社(1988), 鎌田光登 訳『中国朝鮮族の教育文化史』コリア評論社(1988), 金 賛汀『日の丸と赤い星——中国大陸朝鮮族を訪ねて——』情報センター出版局(1988), 大村 益夫『シカゴ福万(ボンマニ)——中国朝鮮族短篇小説選』高麗書林(1989), 山本将文『写真ルポ:中国の朝鮮族』東方出版(1989), 富田和明『延迎下宿日記:豆満江に流る』第三書館(1993), 姜 在彦『満州の朝鮮人パルチザン』青木書店(1993), 高崎宗司『中国朝鮮族』明石書店(1996), 鶴嶋雪嶺『中国朝鮮族の研究』関西大学出版部(1997), 太田崑『中国の朝鮮族を見て』日本図書刊行会(1997), 竹田旦 編『朝鮮族の民俗文化』第一書房(1999), 劉孝鐘他 編訳『ソウルパラム大陸パラム』新幹社(1999), 鄭 雅英『中国朝鮮族の民族関係』アジア政経学会(2000), 韓 景旭『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』中国書店(2001), 佐々木衛・方鎮珠編『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店(2001), 趙鳳彬『東北アジアを生きる——あるコリアン系中国人の「三国志」』創言社(2003), 大村益夫『中国朝鮮族文学の歴史と展開』緑蔭書房(2003), 滝沢秀樹『中国朝鮮族への旅——中朝国境の河, 鴨緑江・豆満江北岸紀行』御茶の水書房(2005)。
- 3) 朝鮮族がもっとも集中している延吉市の例では、1989年における朝鮮族新生児の数は4,145人で、2001年には1,298人に減少し、10年余りでおおよそ3分の1にまで大きく落ち込んだ。また、昨年度の延吉市における朝鮮族小・中学校の在校生の数は1998年の3万4,000人余りから2万2,000人余りに激減し、減少幅はおおよそ35%に達した。
- 4) 2005年9月4日、韓国の外交通商部は世界各国に居住する海外同胞の数が合計663万8,338人であると発表した。外交通商部では2年に1度海外同胞現況調査を実施しており、今回の調査では、海外各国の市民権を保有した同胞が378万2,000人余りで、永住権取得者が170万8,000人余り、一般滞留者が90万8,000人余り、留学生が23万9,000人余りであるとした。また、海外同胞が居住している175カ国中、朝鮮族を含む在中同胞が243万9,395人で一番多く、次にアメリカ、日本、旧ソ連から分離した独立国家連合、カナダ、オーストラリアなどの順で、1万

人以上の同胞が居住している国は17あると発表した。大陸ないし地域別では, アジア 359万人 (54%), 米州地域 239万人 (36%), 独立国家連合とヨーロッパ 64万人 (9.7%), アフリカ 7,900人 (0.12%), 中東 6,923人 (0.1%) とされている。なお, 2003年の調査時より海外同胞数が増加した国は中国 (29万4,606人), カナダ (28,049人), オーストラリア (24,376人), ベトナム (9,755人), フィリピン (8,900人), イギリス (5,810人) などで, 増加した原因としては経済交流の急増, 留学生増加, 自営業者たちの海外進出などを挙げている。一方, アメリカは2年前に比べて約7万人の減少, 高麗人たちのロシアへの再移住が多かったウズベキスタンも29,000人余りの減少となった。なおニュージーランドも, 移民要件を強化したことにより1,500人ぐらい減少した, としている。

- 5) これは韓国の代表的な脱北者支援・保護団体である「良い友」などによる推算であり, 韓国政治発展研究院の推算では, その数はおよそ10万人である。

文 献

강권찬

2003 「기획망명후의 탈북자문제 해결방안」『민족연구』 Vol.10, pp.166-180 한국민족연구원.

김일수

2004 「탈북자 문제에 대한 한국의 입장과 대응」『세계지역연구논총』 Vol.22, pp.329-357 한국세계지역학회.

김병로

1994 「탈북자 발생 배경 분석」『통일한국』 6월호, pp.34-37 평화문제연구소.

이영기

1996 「탈북자 현황과 대책」『사회과학논총』 (제12집), pp.273-278 명지대학교 사회과학연구소.

임채완

2001 「중국내 탈북자의 성격 분석」『한국동북아논총』 Vol.19, pp.53-78 한국동북아학회.